

審査の結果の要旨

氏名 三枝暁子

本論文は、中世京都における寺社勢力と室町幕府との関係を考察している。近年の研究によって、中世都市において寺社の存在がいかに大きな位置を占めていたか、またその寺社を室町幕府がどのように取り込んでいったか、が明らかにされつつある。しかし、都市と寺社と幕府の三つがどう関わっていたのかという問題となると、きわめて不明瞭であった。本論文はその三つの関係を明らかにしようと試みたものである。

本論文が取り上げる寺社勢力は、中世の京都でとりわけ重要な位置を占めた祇園社と北野社、ならびに両社を末寺末社とする山門延暦寺である。序において、寺社勢力研究の意義と二つの神社をとりあげることの意味を語ったのち、第一部では「南北朝期の山門・祇園社と室町幕府」と題し、山門・祇園社間の人的・物質的關係を明らかにするとともに、双方が京都支配とどう関わっていたのかを、所領支配や経営の実態、将軍による御師職補任の意義、さらには双方に組織された非人身分の犬神人や坂者の存在形態を通じて明らかにしている。第二部では「中世後期北野社をめぐる社会構造」と題し、北野社の祭礼への室町幕府の関与に着目しつつ、北野社に組織された西京七保とそこに住む神人の活動、また北野社によって罪科を理由に家屋が没収されたり売られたりする習俗を考察して、都市に生きる人々の動きの一端を明らかにしている。

このように本論文は、京都の寺社勢力に視点をあてて、室町幕府という権力とのかかわり、都市に生きる人々とのかかわりの双方を、立体的に捉えることに成功した。提示された新たな知見のおもなものは、つぎの三つである。①南北朝時代京都の都市民衆の動向を、祇園社の記録を丹念に読み込んで明らかにした。②差別された犬神人や坂者などの実態を、研究史の批判的検討を通じて明快に解き明かした。③御師職を通じて将軍が祇園社と北野社を独自に組織化し、山門の支配下から切り離していったことを指摘した。なかでも③と関わって、幕府が朝廷の権威をふりかざしつつ寺社勢力を独自に組織化した画期が南北朝最末期にあったことを実証した点は、室町幕府研究にも裨益するところが大きい。

もちろん、安易に権門体制という概念をあてはめていたり、史料の読みに若干の問題があったりなど、不満を感じさせる部分は認められる。とはいえ、本論文が提示した室町時代の幕府と都市、寺社の関わりについての指摘は、今後の研究の大いなる基礎をなすものである。委員会はこの点を高く評価し、博士（文学）にふさわしい業績と認めることで一致をみた。